
来客

催吐剤

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

来客

【Nコード】

N7493P

【作者名】

催吐剤

【あらすじ】

玄関のチャイムが鳴る。

休日の午後、部屋でくつろいでいると、玄関のチャイムが鳴らされた。

私は居留守をしようと思った。読んでいた小説が佳境だったからだ。

もう一度チャイムが鳴った。

残念なことに家族は出払っている。客があれば私が出なければならぬ。

しかし面倒だ。それにどうせ大した客ではないだろう、と私は思うことにする。

またチャイムが鳴る。

私は聞こえないふりをして小説に集中しようとする。あと十数ページで終わる。

しかし、しつこくチャイムは鳴る。

私は溜め息を吐き、ページに茶を挟むと玄関へ向かう。

その間にも鳴るチャイムを聞きながら、私はドアノブへと手を伸ばす。

「はい、どうぞ、開いてますよー」

私は驚いた。私はまだ何も言っていないからだ。それに、声は私の背後からした。

私は恐る恐る振り返ろうとした。

すると、私の手の中でドアノブが回り、扉が薄く開かれた。

私は反射的に扉を閉め、鍵をかけていた。

カチャンと鍵のかかる音がした一瞬後に、凄まじい勢いでガチャガチャガチャとドアノブが回転しだし、扉がドンドンと鳴り出した。

振り払うようにしてドアノブから手を離し、私は悲鳴をあげた。扉は叩かれるたびにミシミシと音をたて、今にも破られそうだった。

「やめて！」

私はしゃがみ込んで耳を塞いだ。扉を叩く音はますます大きくなっていく。

私は頭を抱え、訳も分からずに意味のないことを叫んでいた。扉を叩く音をかき消そうとしているかのように。

と、私は誰かに背後から優しく抱き締められ、同時に扉の音が止んだ。

誰かは耳元で囁いた。

「また迎えにくるからね」

私は気を失った。

最近、私は考えている。あのとき、咄嗟に扉を閉めていなかったらどうなっていたのだろう。

あのとき背後から聞こえたのは私の声だった。あれは確かに私の声だ。言い方まで同じだった。

それに扉が開いたとき確かに私は見た。私の顔を。私と全く同じ顔を。

その顔は狂喜に歪んでいた。

今もチャイムは怖い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7493p/>

来客

2010年12月31日03時32分発行